63　泌尿器科悪性腫瘍におけるferritin測定の意義

東京都養育院付属病院核医学放射線部
木戸　晃、黒田　彰、飯尾正宏、山田英夫。
東京慈恵会医科大学泌尿器科
町田豊平、三木　誠、大石幸彦、上田正山、柳沢宗利。

IRMA法を用い、泌尿器科疾患113例に対し血清ferritinの測定を行った。泌尿器科疾患の内訳は、腎細胞癌35例、腎盂尿管腫瘍4例、膀胱腫瘍13例、前立腺癌33例、睾丸腫瘍5例、等であった。

結果）　血清ferritin　値は、腎細胞癌32例中18例で、睾丸腫瘍5例中3例（Chorio carcinoma）で異常高値を示した。

腫瘍の進行度と血清ferritin　値の関係を、Stageの明らかな腎細胞癌24例を対象に検討した。内訳は男子18例、女子6例であった。男子18例中Stage Ⅰは5例で、これらの血清ferritin値は299ng／㎖、StageⅡは4例、430ng／㎖ Stage Ⅳ 9例881 ng／㎖であり、Stageの高いもので血清ferritin　値が高値を示す傾向が認められた。

腎細胞癌組織中のferritin　測定を行った。Biebes等の方法を参考とし組織よりsupernatantを作成し、組織中のferritin濃度を測定した。また、これらsupernatantを用い、正常腎組織中のferritinとのheterogeneityの検討を、chromatography等を用い行った。

結語）　腎細胞癌、睾丸腫瘍（chorio carcinoma）において、血清ferritin　は腫瘍のマーカーとして有用である事が示唆された。

64　放射線治療経過観察におけるＣＥＡ値の意義

慶大医学部　放射線科
小須田　茂，安藤　裕，高木八重子，正木英一，連　熙隆，久保敦司，土器屋卓志，宮本　宏，橋本省三
同．放射線治療室
北川五十雄，及川勝夫，宗像雅則

我々は昭和52年10月より，主として放射線治療患者のＣＥＡ値（Sandwich法）を測定して来た。

測定件数は約2,500件で，そのうち放射線治療群は半数近くを占めた。

放射線治療群の対象疾患は乳癌，食道癌，子宮頸癌，悪性リンパ腫，肺癌，頭頸部腫瘍，泌尿器系悪性腫瘍，脳腫瘍等で，放射線治療前，治療中，治療直後，治療数ケ月後にＣＥＡ値を測定し，その変動を比較検討した。

非放射線治療群の対象疾患は大腸癌，胃癌，その他各種悪性腫瘍および各種良性疾患であり，進行性大腸癌では従来の報告と同様，ＣＥＡ値は術前に2.5㎎／㎖以上の異常値を示し，手術前後の治療効果の判定，術後再発・転移の早期発見に有意義な結果が得られたものがほとんどを占めたのに対し，放射線治療患者のＣＥＡ値は放射線治療前に2.5㎎／㎖以上の異常値を示したものは少なく，放射線治療前，治療中，治療直後のＣＥＡ値の変動と臨床所見との間には期待すべき相関は得られなかった。

放射線治療前に2.5㎎／㎖以上の異常値を示したものは遠隔転移・再発例がほとんどであり，放射線治療にてＣＥＡ値の低下を示すものは少なく，相関関係はみられなかった。

しかし，放射線治療後の長期経過観察例のうち，乳癌，食道癌，肺癌，子宮頸癌等では臨床所見（遠隔転移・再発）に先行して異常値を示す傾向がみられ，放射線治療後の経過観察には有意義であると思われた。

Presented by Medical*Online